

Title	孤立語型言語統語論構築への新しい試み：ベトナム語・日本語対照研究の立場から
Author(s)	Le, Hoang
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58755
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	LE HOANG
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第25号
学位授与年月日	平成15年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	孤立語型言語統語論構築への新しい試み —ベトナム語・日本語対照研究の立場から—
論文審査委員	主査 教授 富田 健次 副査 教授 三原 健一 副査 教授 仁田 義雄 副査 教授 宮本 マラシー 副査 東京外国語大学 峰 岸 真琴 AA研教授

論文の内容要旨

本論は典型的孤立語型言語であるベトナム語に対して、これまでのように主語・述語や主題・解説に基づいて文法分析・文法記述を行うことが不可能であることを論証した上、幾つかの新しい概念を導入し、新たな統語論の枠組みを構築しようとするものである。

第1章では、一般文法理論とベトナム語のような孤立語の文法の個別研究に関する諸事情について触れた上、本論の基本的な立場を表明する。

主語の前提となる語の認定、名詞と動詞の区別、動詞の能動/受動と自/他、名詞の格という文法範疇の抽出ができてはじめて主語の議論が可能となるので、それらの問題について第2章から第5章にかけて順次に検討する。第2章ではベトナム語における語の認定が困難であることを述べ、語があるとしても、それは語彙的意味のみ持つものと、その語彙的意味のあり方によって特定の文法機能を担い得るものの二タイプしかないので、西欧語の語とは根本的に異なり、正にその語根のような存在であることを明示する。素材となる語が異質な存在であるので、その語から構成される建築物となる文の組立ての法則性・規則性、即ち文法も、当然、西欧語と同じ取り扱いをすることは許されない。また、単音節言語であるベトナム語においては語よりも、**tiếng** [音=音節] の存在の方が認知的に明確であり、文法分析・文法記述はそれを基本単位としなければならないことを議論する。

第3章では、従来提唱されてきた「結合能力」、「分布位置」、「統語機能」、「品詞転換」、「一語多類」などが、名詞と動詞を品詞として区別するための形式的基準にはなれないことを論じた上で、西欧語の語根に当たるベトナム語の「語」が、原則として品詞を超えた抽象的な存在であることを指摘する。その議論を通じて、名詞と動詞の分類が普遍的であるという見解を再検討する必要がある、その一方で、ベトナム語のような孤立語に対して、

品詞分類に拠らない統語論の枠組みを構築しなければならないことを提言する。

第4章ではベトナム語においては、仮に動詞という品詞が存在するとしても、その能動・受動の範疇、自/他範疇が抽出できないことを論述する。文法範疇の形式とされている *được* [得る]、*bi* [被る] などは機能語ではなく、それらの語彙的意味のあり方によって能動・受動に類似する意味を表し得る内容語である以上、それらの言語化を決定するのは文法上の必然性ではなく、意味上の要求であるからである。述語動詞と、それに属する各文法範疇は文法分析・文法記述に欠かすことのできないほど重要なものであるとされているが、本論の分析を通じて、この議論がベトナム語のような孤立語に対しては適用できないことを改めて強調する。

第5章ではベトナム語においては、仮に名詞という品詞が存在するとしても、文における名詞の意味役割と、それを明示する格標識から成る格範疇が確立できないということを論述する。語順はそれほど固定しておらず、前置詞とされる *tiếng* [音] のグループ全体は内容語の性格を維持しているからである。また、格範疇が存在しない孤立語に対して「動詞連続」(serial verb construction)を適用しようとする立場もある。しかし、その連続を構成する動詞が分布的に連続せず、また同一の主語(主題でもかまわないが)によってコントロールされないこと、動詞が生起しない構文が包括できないこと、動詞それ自体の認定基準も明確ではないことなどから、「動詞連続」は適用できないと考える。そこで、本論では省略や語順の変化などによって複数の文が統合された「統語的凝縮」(syntactic condensation)という概念を提起し、その有利性について論証する。

第6章ではまず、ベトナム語の文法研究における「主語設定論」で提示されている形式的諸基準が正当性・厳密性を欠くことを指摘した上で、第2章～第5章で述べた主語の前提となる諸概念が確立できないから、主語があり得ないことを論述する。次に、Li Ch.N. and Thompson S.A. (1976)以来、ベトナム語のような孤立語は主題優先言語であり、そのような言語に対して主題・解説を文法分析・文法記述の基本概念とするという「主題優先論」が広く認められているようであるが、その論も様々な問題点があり、ベトナム語のような孤立語に対して適用できないという議論を提示する。

現代の一般文法理論では上述のような言語の存在が想定されていないため、それに対する適切な記述上の枠組み、またそれに伴う概念・範疇の体系化もできていない。そのためこそ、ベトナム語のような孤立語に対して適用できるような、新たな統語論の枠組みを構築しなければならない。第7章では、本論で提起するこのような枠組みについて詳しく論述する。まず、ベトナム語において明確に認知できる *tiếng* [音] と *tiếng* [音] がその意味的相関関係によって結合し、文を組み立てていく仕組みがこの言語の文法の骨格であると表明する。文法分析・文法記述は、*tiếng* [音] の範疇的意味のあり方と、それによって決定される *tiếng* [音] の文法的振る舞い方に関する規則性・法則性を明確化しなければならない。

換言すれば、統語論は *tiếng* [音] の意味分析から出発し、統語的証左を探るべきである。

また、形態的要素を持たないベトナム語の統語構造には「論理認識対象 + 論理認識内容」から成る人間の論理認識の構造が直接的に反映するので、こうして論理認識構造と統語構造が統合された言語の部門を「論理文法レベル」(Logico-Syntactic level)とし、この種の言語の文法分析・文法記述に対して適用しなければならないと主張する。このレベルにおいては論理認識対象を表す構成素を「論理認識主語」(Logico-Cognitive Subject)、それに対応し、論理認識内容を表す構成素を「論理認識述語」(Logico-Cognitive Predicate)と仮に呼んでおく。これらの概念は、本論で提示する統語論の枠組みの根幹をなすものである。そして、「論理認識主語」と「論理認識述語」から成る構造の重層化及び「文法的凝縮」によって、文の重層構造 (Multi-Layered Structures) が形成される。ベトナム語の文法分析・文法記述は、各 *tiếng* [音] の語彙的意味のあり方を基盤にし、この重層構造を明確にしなければならないと考える。

第 8 章と第 9 章ではそれぞれ *thì* と *là* の意味的・文法的機能について議論する。*thì* を主題のマーカ、*là* を繫詞とする見解を批判した上で、前者は「対比」、後者は「必然性」、「即刻性」、「現実性」の意味を表しながら、共に新たな句や節の開始点を示すという文法機能を担うという議論を展開する。ベトナム語の「論理認識主語」と「論理認識述語」の構造におけるそれら *tiếng* [音] の位置づけを確定すると共に、文法的機能のみを持つのではなく、特定の語彙的意味を持つことにより、特定の文法機能を担い得るという、いわゆる「機能語」の本質を解明する。

第 10 章では本論の見解をまとめた上、*tiếng* [音] の範疇的意味を更に下位分類し、「論理認識主語—論理認識述語」の構造の記述を詳細化することにより、ベトナム語のような孤立語の統語構造を明らかにすることができ、また、本論で提起する統語論の枠組みをタイ語、クメール語、中国の古典文語などに適用し、その厳密化と普遍化を図ることができるのではないかという今後の課題と展望を表明する。

ベトナム語の統語構造を記述するための新しい枠組みを構築し、更に他の孤立語に対してその普遍化を目指そうとする本論のテーマは、博士論文としては過大であると筆者は十分認識している。能力を越えている部分や、今後更に検討する必要がある部分なども大いにある。しかし、孤立語に対して適用の難しい現代の文法理論の基本的な概念・範疇を無批判で利用し、文法分析・文法記述を継続すると、極めて危険であると考えられる。そのような分析・記述は孤立語の言語実態の研究とその教育にも、一般文法理論全体の進展にもあまりにも「有害無益」であるからである。その意味で、本論が、少なくともそのような問題意識を提供でき、今後より広くより深く議論されるようになれば、これに勝る幸はない。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、孤立語型言語の文法記述に際して、従来のような主語・述語、主題・解説の二分論を廃し、新たな統語論の枠組みをベトナム語の文法記述を通して構築しようとするものである。論文は 10 章から構成され、第 2 章から第 5 章にかけてはそれぞれ語の認定、品詞としての名詞と動詞の区別、動詞の能動/受動と自/他、名詞の格などの文法範疇の確立がベトナム語においては困難であることが指摘されている。前提となるべきこれらの概念や範疇が存在しない限り、いわゆる主語の存在はあり得ないのではないかと主張する。上記の諸概念設定の困難さについては先行研究でも既に多く指摘されてはいるが、本論文では詳細な論証がなされ、主語否認の根拠が提示されており、説得力に富む。特に、第 5 章における「動詞連続仮説」に対する批判などは高く評価できる。

一方、ベトナム語のような孤立語は主題優先言語であり、そのような言語に対して主題・解説を文法分析・文法記述の基本概念とする立場もあるが、これに対して現在まで積極的な反論がなされてこなかった。本論文の第 6 章ではそのことについての本格的な議論が展開され、主題優先言語論の不適切さが指摘された。

第 7 章では、ベトナム語において明確に認知できる *tiếng* [音] と *tiếng* [音] がその意味的相関関係によって結合し、文を組み立てていく仕組みがこの言語の文法の骨格であることが表明されている。文法分析・文法記述は、*tiếng* [音] の範疇的意味のあり方と、それによって決定される *tiếng* [音] の文法的振る舞い方に関する規則性・法則性を明確化することにほかならず、換言すれば、統語論は *tiếng* [音] の意味分析から出発し、統語的証左を探るべきであることが明確に述べられている。

このような構想の下で、執筆者は「論理文法レベル」を設定し、このレベルにおいて「論理認識主語」と「論理認識述語」という全く新しい文法機能を仮定している。これらの概念は、本論文で提示される統語論の枠組みの根幹をなすものである。また、「論理認識主語」と「論理認識述語」から成る構造の重層化及び「文法的凝縮」によって、文の重層構造が形成されるとする。上記の枠組みはいまだ粗削りで、今後更なる厳密化及び他の孤立語への普遍化が求められるものの、ベトナム語のような孤立語の文法分析・文法記述に対しては主語・述語、主題・解説よりはるかに簡潔で、客観的なものであると評価される。

執筆者は現代の一般文法理論と孤立語型言語の実態の間に大きな齟齬があるという問題意識を提供し、孤立語に対して全く新しい統語論の枠組みの構築を行ったという点で、一般文法理論と個別語研究の両者に対する貢献が認められ、今後更に活発な議論が闘わされることが期待される。

本博士論文では独創的、且つ一貫性のあるシステムが築かれたという点で高く評価できるが、例えば「主題優先」と「意味的 aboutness 関係優先」などの区別に対しては更に明確な説明が求められる。また、語や品詞や主語などの諸概念の否定の理由は真に正当なものであるのか、別の観点か

らの設定の可能性はないのか、挙げられた諸例文の普遍性を検討する必要はないのかなどの点で少なからぬ疑問が提起された。一方、執筆者が主張する品詞分類に拠らない文法理論は中国語など他の孤立語に対しても普遍化できるのか、言語教育への応用は可能なのかなどの問題も多く、今後更に検討を加える必要がある。

審査の概要は以上の通りであるが、結論的に言えば、本論文は困難な課題に勇気を持って意欲的に取り組んだ労作で、質量ともに博士号を授与するに相応しいものである点で、審査委員全員の意見が一致した。